

「ファリサイ派の人と徴税人のたとえ」

2023年09月28日

「ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、私はほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でなく、また、この徴税人のような者でないことを感謝します。私は週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人の私を憐れんでください。』言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。誰でも、高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。』（ルカ18：11～14）

主イエスは、自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対して、一つの譬えを語られた。二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。ファリサイ派の人は立って、心の中で次のように祈った。「神様、私はほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でなく、また、この徴税人のような者でないことを感謝します。私は週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。」彼は、他の人たちのように、人の物を奪ったり、自分の利益を求めて不正を行ったり、本能をむき出しにして姦淫に走ったりせず、また、ローマの手先になって徴税し、その税金をごまかして着服するような徴税人でもないことを感謝している。彼は、社会正義を行い、何一つ恥ずかしい生き方はしていないと、自らの潔癖さを神に訴えた。更に、律法通り、週に二度断食をして、全収入の十分の一を神に献げています。神の前に落ち度のない信仰に励み、正しい生活をしていますと祈った。一方の徴税人は神殿の正面から遠く離れた所に立ち、目を天に上げようともせず、胸を打ち叩きながら、「神様、罪人の私を憐れんでください」と、一言だけを祈った。主イエスは、二人の祈りを譬えた後、「言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。誰でも、高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と断言された。神に祈りを聞かれ、義とされたのは、ファリサイ派の人ではなく、徴税人であった。自分を正しいとうぬぼれる者は低くされ、自分の罪を悲しみ、へりくだって神の憐れみを求める者は高められる。これを聞いたファリサイ派の人々は腹立たしく思ったであろう。罪人と烙印されて、ユダヤの共同体から排斥されていた人々は大きな慰めを得たであろう。

ペトロは、ガリラヤ湖で不漁であったが、主イエスから「沖へ漕ぎ出し、網を降ろして漁をなささい」と言われ、網を降ろしてみると、網が破れそうになるほどの魚がかかった。その時、ペトロはひれ伏して、「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間です」と告白している。ペトロは何も罪を犯してはいない。しかし、彼は主イエスに「聖なる方」を見たのである。その時、彼は自分の罪深さを知った。神の前に立つということは、神の聖と対極にある自分の罪を同時に認識するということである。

パウロはローマ書3章で、「正しい者はいない。一人もない。… 善を行う者はいない。ただの一人もない。… 彼らの目には神への畏れがない。（ローマ3：10～18）」と、人間の罪を凝視している。その罪に赦しを与え、義としてくださったのが主イエスの十字架の福音であった。パウロは赦しの福音を全身で受けとめ、全てを献げて宣教に邁進した。神の赦しを信じた者は、自分を誇らず謙遜に、力の限りを生きる者とされる。